日本生活科・総合的学習教育学会会報第３５号（2009.10.1.発行）掲載＜巻頭言＞

‘ｔｅａｃｈｅｒ’もいいけど、‘ｅｄｕｃａｔｏｒ’をめざそうよ

本学会 事業部長・上越教育大学大学院　　木　村　吉　彦

平成元年の学習指導要領に生活科が新設されて２１年。生活科も昨年、ようやく成人を迎えました。同時に、今回の改訂がこれからの生活科のあり方を決めることになります。

今回の改訂では､教科目標はそのままですが、学年目標が一つ増え、「自分のよさや可能性に気付く」ことが改めてクローズアップされました。これは、「自立への基礎を養う」ために大切な「自己認識」つまり「自分自身への気付き」の重要性を再確認したことを意味しています。私たち教師は、「できるようになったぼく・わたし」「わかるようになったぼく・わたし」を子どもたちにしっかり自覚させ、子どもたちの「自己肯定感（「自尊感情」とも言い換えられます)」と「生きる自信」をさらにはぐくんでいかなくてはなりません。今改訂によって自己認識の重要性が再確認されたことは､まさに｢生きる力」育成の切り札としての生活科の面目躍如といったところです。

そもそも生活科は、２１世紀に求められる我が国の教育の方向性を示したものでした。その方向性とは、我が国の学校教育の基本方針として改めて強調された「生きる力」の育成です。生活科は、従来教科と異なり、教科の学問的背景を持っていません。しかも、活動や体験を通して学習するという方法を大切にするので、目の前の子どもたちは、一体何に興味・関心があるのか、どんな活動をやりたがっているのかという「子ども理解」がはじめにあります。同時に、唯一の正しい答え、決まった答えというものもありません。子どもそれぞれの中から引き出され、生み出された答えがすべて○です。従って、教師は、子どもと共に活動し、共に学習を創りながら、子どもの内にある力を引き出すような授業を心がけなければなりません。

日本語で「教育する」と訳される‘ｅｄｕｃａｔｅ’の元々の意味、それは「引き出しを開ける」という意味です。外から見て何が入っているか分からないものを引き出して中身を明らかにする、ということです。教育学の見地からしますと、「潜在的な力を引き出して顕在化する」「内なる力や思いを外に出してあげる」「子どもの可能性を引き出してあげる」ということになります。生活科や総合的な学習で最も大切なことは、子どもの思いや願い、興味・関心、意欲、好奇心、探究心、自己表現力等々、これら全てを｢引き出してあげる｣教師の姿勢です。従って、生活・総合で子どもを育てようとするとき、教師の心構えとしては、「教える」ではなく「引き出す」なのです。

ここで皆様に標題を再提案します。

‘teacher’もいいけど､‘educator’をめざそうよ